

# 2011年度全国研究集会報告

〔 2011年6月9日（木）～10日（金） 新宿ワシントンホテル 〕

テーマ 「復興・再生に向け労働組合・協同組合に出来る役割を考える。」

6月9～10日、2011年度中央労福協「全国研究集会」が、全国から240名の参加によって、東京で開催されました。

この研修会は、当初、北部ブロック（仙台市）での開催が計画されていましたが、3.11発生した東日本大震災により、開催地を変更し、未曾有の災害となった東日本大震災の『復興・再生に向け労働組合・協同組合に出来る役割を考える』をテーマとしての開催となりました。

開会にあたり、震災被害に遭われた方への黙祷を行ったあと、主催者を代表して遠藤幸男副会長（東部・東京）は、6月4日に急逝された笹森中央労福協会会長への追悼の意とともに、東日本の復興に向けた研究集会となるよう挨拶。

続いて北部ブロック影山会長（福島県労福協）より全国からの支援のお礼と、現地の現状紹介を含めた挨拶があり研修会がスタートしました。

2日間の日程では、日本生協連、全労済、労協連、労金協会の構成団体やNPO、フードバンク活動を行なう関係団体から大震災に対する取り組み報告と、パーソナルサポートモデル事業をスタートさせた千葉県野田市の根本市長から、避難被災者への支援対応などについての特別報告がありました。

また、連合の小島総合政策局長からは、災害復興・再生にむけた連合政策と、連合の原子力政策全体についての総点検と見直しを行なうことなどの特別報告。

最後の基調講演は、立教大学の内山教授（哲学）から「大震災が我々につづけたものは何か」というテーマでの講演。現在の日本社会は、「巨大化した様々なシステム（電力・交通・通信など）が相互依存的な関係で成り立っており、この度の大震災ではシステム崩壊の連鎖が起こった。」と巨大システム依存型社会の警鐘とともに、「絆」を大切にしてきた日本社会の伝統的な社会感の大切さと、他者を犠牲にしながら生きて行く市場原理主義の危険性を指摘されました。

最後に、研究集会のまとめとして中央労福協の高橋事務局長は、●自然の前に科学技術がいかに無力であったかを謙虚に学ぶこと。●「行け 行け！」の直線型社会から循環型社会への再考が必要であること。●地元機能の復権＝を学び、労働組合や協同組合がその担い手になろうと結び、2011年度全国研究集会が終了しました。

鳥取県労福協参加者 安田邦夫 前田厚彦 小泉俊一  
（報告 事務局）



遠藤副会長 挨拶



生協連 芳賀専務



研修会場